

**令和元年度秋田県総合政策審議会
第2回農林水産部会 議事要旨**

1 日 時 令和元年7月17日（水） 午後1時15分～午後5時
〔現地視察〕 午後1時15分～午後2時
〔会 議〕 午後3時～午後5時

2 場 所 〔現地視察〕 農事組合法人たねっこ（大仙市協和）
〔会 議〕 総合庁舎6階607会議室

3 出席者

【農林水産部会委員】

今 野 克 久 （有限会社今野農園代表取締役）
佐 藤 総 栄 （有限会社秋田グリーンサービス代表取締役）
舘 岡 美果子 （果夢園代表）

【委員外有識者】

工 藤 浩 一 （農事組合法人たねっこ統括主任）
工 藤 裕 紀 （秋田県漁業協同組合専務理事）

【県】

小 野 正 則 （農林水産部次長）
高 野 尚 紀 （農林水産部参事（兼）農山村振興課長）
齋 藤 正 和 （農林水産部農林政策課長）
桜 庭 憲 光 （農林水産部農業経済課主幹（兼）班長）
藤 村 幸司朗 （農林水産部農業経済課販売戦略室長）
本 藤 昌 泰 （農林水産部水田総合利用課長）
安 藤 鷹 乙 （農林水産部園芸振興課長）
小棚木 栄 作 （農林水産部畜産振興課主幹（兼）班長）
舩 谷 雅 広 （農林水産部農地整備課長）
阿 部 喜 孝 （農林水産部水産漁港課長）
石 山 正 喜 （農林水産部全国豊かな海づくり大会推進室長）
沼 倉 直 人 （農林水産部林業木材産業課政策監）
鈴 木 光 宏 （農林水産部森林整備課長）
土 門 久仁子 （観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課副主幹）

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

《議事要旨は会議部分のみ》

4 部会長あいさつ

◎今野部会長

本日2回目となる農林水産部会、よろしくお願いします。現地視察の内容も踏まえて、今日も忌憚なくお話ができればと思っている。

5 議事要旨

◎今野部会長

始める前に、審議内容は議事録としてホームページに掲載されるが、その際は委員名を公開で行うので了承願いたい。

それでは議事に入る。まず始めに、(1) 前回部会の論点整理について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料1により説明～

◎今野部会長

ただいまの説明について、意見・質問はあるか。

～意見なし～

◎今野部会長

では、本日の主題である、各論点に対する意見交換に移りたい。事務局から意見交換のテーマが示されているので説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料2により説明～

◎今野部会長

それでは、事務局から説明のあった内容について、各委員から意見を伺いたい。意見をいただきたい事項として事前配付された資料の内容を中心に、各委員から10分程度ずつ意見ををお願いします。

◎佐藤委員

ウッドファーストあきた木材利用ポイント事業について、周知が十分ではないと思う。私が家を建てる時も、制度の活用を工務店に相談したところ、工務店が制度を

知らず、逆にこちらから教えたことがあった。住宅着工数を増やす有意な制度の一つであるので、制度の周知を徹底し、制度を活用してより安価に家を建てられることを工務店が提案できるようにしてもらいたいし、施主に対してももっとPRすべきである。また、申請者が多いと12月早々に予算がなくなってしまうが、その後に家を建てる人もいると思うので、もう少し多めに予算を確保し、売り込んでいくべきではないか。

森林環境譲与税に関しては、今年は初年度なので、意向調査の実施が一番大きいと思うが、この調査によって、経営意欲を増すのか、逆に諦めるのか、という2択になるのではないかと思う。

森林を全部任せたいという人は全体の10%以上いて、山を持っていても固定資産税の負担などから手放したいと考えているが、市町村が取得することはなく、我々のような意欲ある事業体に所有権を移転し、経営していく方向になるのではないか。弊社では、数年前から、経営できなくなった森林を購入し、5～600ha程度所有しているが、税制面で困った状況になっている。経理上、切らなかった木は在庫になるが、我々にとっては不良在庫でしかない商品価値のない細い木まで在庫と言われてしまう。しかし、買った事実はあるので、原価になってしまう。仮に、大量の森林が事業体に移転されれば、税制上の優遇措置がないと、黒字倒産になる危険性があることを非常に危惧している。近い将来出てくる問題であり、国も認識していると思う。

また、森林環境譲与税については、再造林の事業にも充当してもらいたい。

林業大学校については、もっと専門性を持ったコースを開設してはどうか。1年目は基本、2年目は専攻として、もう少し突っ込んだ内容の研修とし、技術についても検定制度を設けるなど、もっと厳しくし、しっかりとした人材を育成すべきである。そうすることで、社会的な厳しさも身につく。多少技術が身についた学生の延長線上ではなく、社会人としてもしっかりとした人材を育ててもらいたい。

クラウドについては、タブレット端末でトラックの運送のデータを打ち込み、クラウドを通して組合の事務所に転送される形になっているが、携帯の電波を使うので、電波が届くところに出てこないでデータを送れないし、データの蓄積もできない。携帯の電波以外のシグナルでの通信にするなど、改善が必要である。

◎今野部会長

要は、携帯の電波が入りにくい場所では、クラウドにデータを送信できないのか。

◎佐藤委員

送信できないし、携帯のメールのように、データが蓄積されて電波が良い場所に行くと自動送信されるシステムでもない。また、今はただ運送のデータのリアルタイム送信と、製材所と生産者側のマッチング程度だが、クラウド上のGIS等のビッグデータを誰でも活用できるようなシステムがあればいい。GISだけでなく、航空データなどについて、個人対応ではお金がかかるので、まとまってデータを取り、クラウド上のそのデータを活用して施業システムを組んだりするのに使えれば良いと思う。

◎今野部会長

ちなみに、GISシステムを入れると、地域内の木の量なども、会員であれば誰でも見られるのか。

◎佐藤委員

現在はシステムが入っていないと見られない。GISのデータはビッグデータ化したデータとは異なる。実際に持っている施業図と、実際我々が山に行って見る図面とは若干違うことがある。普通の施業図はまっすぐになっているが、実際に行ってみると小さな沢が入っていたりすることもあるので、もう一回改めて上からレーダー測定したり、大型の3Dスキャナーでデータを取ったりすることになる。そういったところができると変わってくる。長野県森林組合連合会では、現場に行くのに、図面ではなく3Dスキャナーのデータが入ったタブレットを持って行って、タブレットに表示された立体画面を見ながら歩いていっている。

◎今野部会長

ドローンを飛ばして地形データを測定するというのは聞いているが、山を全部3Dスキャナーで取り込んだのか。

◎佐藤委員

そのとおりで、手間がかかるが、そうしたところが確立されている。

ただし、導入コストが3,000万円と、個人で持つには高いので、測定してもらったデータを使わせてもらうことが、今後省力化する上では必要なことと思う。

◎今野部会長

林業大学校における最低限の社会人教育とは、どういうレベルを求めるのか。

◎佐藤委員

遅刻しないとか一番遅く出勤してこないとか、ものを壊したら謝るなど、最低限のことである。林業大学校に限らず、今の若者は、怒られても謝らなければならないことに気づかない。林業大学校では時間があるので、ごく普通のことだが、そうしたところもしっかり指導してほしい。

◎今野部会長

そこからとなると、教育が大変である。考え直さないといけない。

◎館岡委員

果樹の場合は、自分の生産物が一番良いものになるように、基本は教えてくれるが、肝心なところは教えてくれないので、隣の畑の作業を観察するなどしている。特にりんごでは、色の出方や見た目が良くないと値段が上がらないので、基本的な作業は快

く教えてくれるが、本当に欲しい情報は教えないところがある。

基本的な最低限の技術は、現地研修会や剪定講習会で、園地を回ってアドバイスをもらったり、1本の木をみんなで剪定するなどして習得している。

父親の代と夫の年代とでは、木の仕立て方から違っている。父親の代では1本の木から4本の枝を出し、そこから細い枝を出して収量を上げる方法だったが、今は1本から2本の枝を出すシンプルな仕立て方が主流で、わかりやすくなった。園主も、管理できなくなったときに備え、最近は、後継者や仲間が作業しやすくなるように、かなりわかりやすい仕立て方に改善してきているが、将来が見えない人の畑ほど、その人しか管理できない状態だったりする。県が、わかりやすいジョイント仕立てを進めており、若い人たちが新植の際に使っているので、防除などの基本的なことを間違わなければ問題ないと思う。

ただ、若手でも、わかったふりをして、「わからない」とは言わない人がある。園地が隣であれば、隣の畑を見て学ぶべきである。一方で、一生懸命すぎて、目の前しか見えないということもある。我が家のように、研修を終えた方が手伝いに来る場合は、作業を指導できるが、全然仲間がいないところでは大変で苦戦しているようだ。

周囲の人は教える体制になっているが、あまり周囲に聞いてくれないという事例は結構ある。年上の人に聞きにくかったら、試験場にでも聞けば良いが、それもしないようである。そういうことから、若手が集まって、困ったことや技術的なことを意見交換する機会を設けてもらいたい。

◎今野部会長

農協の部会など、若手の集まりはないのか。

◎館岡委員

去年くらいから、試験場の方が独自で作った集まりがあるようだ。

若手は、農協の部会にも、果樹試験場の天王分場で月1回開催される講習会にも行かないようだ。周囲が一生懸命引き上げようとしても、電話にもあまり出ないなど、不思議に思うことがあるが、最近、一生懸命やるという話を聞いたので少し期待を持っている。

◎今野部会長

人によっていろいろな教え方がある。どのようにアプローチしていくか、地域で考えていくことになると思う。

◎館岡委員

メガ団地を見に行くと、若手も一生懸命がんばっていて、特に男鹿のキクのメガ団地では、若い人を中心として、潟上や男鹿周辺での成功例になっている。さらに、農の雇用事業を取り入れたり研修に行くなどうまく回っている。メガ団地やたねっこのように、大規模であれば、農業をやったことがない人でも、「あそこなら大丈夫じゃな

いか」と家族が後押ししてくれて、入りやすいのではないかな。そういった観点からもメガ団地は必要だと思うし、良い取組だと思う。

農福連携については、五城目町で木イチゴや野菜を生産している女性のところに、木イチゴの先生が少し障害のある方を連れてきている。先生や施設の方が教えられながら作業をしてもらっているが、そういった方がいないと、何をしてもらえば良いかわらず、農福連携は難しい。多少間違っても問題ない作業であればいいが、大事な作業を任せるには、その人が何をできるかを見極めるのが大変とのことである。

果樹では最近、木の間隔を狭く植えて早く収穫する高密植技術が出てきているので、様子を見ながら取り入れてみようと思っている。収穫まで5年くらいだったものが、3年程度になるようだ。

◎今野部会長

木を大きくしないということか。

◎館岡委員

1本の主枝から出たあまり長くない枝から結構な量を穫る試験や、大きい鉢のイメージだが、その中に梨を植えて、野菜のように水を自動でやるような試験が他県で行われており、難しいところもあるが少しずつ変わってきている。良ければ取組もうと思っている。

果樹は手作業が多く、機械化できるものは草刈と防除くらいである。今、母がなくなってきたので雇用を入れようと言う話があるが、私は、規模拡大には雇用が必要だが、雇用を入れずに夫婦2人でできる方法を考えた方が良くはないかと思っている。例えば10年後に廃園が見込まれる園地が近所にあり、そのときに大規模化の考えがあれば、その畑を買うなり借りるなりして広げる方法もある。隣に若手の経営者がいるので、一緒に大きい畑をやっていくというのも考えている。

◎今野部会長

親御さんにとっては、メガ団地は就職先として安心できる場所ではないか。

◎館岡委員

法人化されていることが大きい。

◎今野部会長

うちは有限会社今野農園であるが、他の集落営農と比べると経営等が良いのではないかなということなので1人入社しており、そういう意味でも、メガ団地は有用である。ちなみに、人数次第と思うが、果樹園では、どのくらいまで規模拡大が可能なのかな。

◎館岡委員

来てくれる人がいたり、リンゴだけ、梨だけに絞るなどすると、規模拡大できるよ

うになる。梨では、1人70aくらいと言われており、2人だと1.4haくらいになる。

◎今野部会長

1人当たり1haにするとしたら、どういったことが必要になるか。

◎館岡委員

枝が出やすいなど、育てやすい品種の導入などが考えられる。

◎今野部会長

4本仕立てから2本仕立てへの変更は、仕立て方は簡単にはなるが、収量はどうか。

◎館岡委員

結果的には同じになる。4本にしても、枝が重なり合うところが出てきてしまい、切らなければならないことがある。

◎今野部会長

もう少し効率化でき、70aが1haになれば、計算上は5人で5haになる。そうした手法があれば良いと思う。

次に私からである。地域の篤農家や指導農業士が有する匠の技の伝承について、先日テレビで、ダリアの栽培方法を伝えるため、動線を調べる機械を付けて、見える化に取り組む様子が放映されていた。時期ごとに映像を見て、事前情報を得た上で現場に出ることを何回も繰り返せば、個人の能力もあるが、天気、水の量、生育から、次の動きが見えてくる。私は稲の動きをある程度イメージできるまで10年かかったが、マニュアルを使って5年に短縮するようなことがこれからの仕事であり、しっかりとした動画のマニュアルを作れば良いのではないか。

外国人材の受入れについては、私自身は受け入れの予定もないが、コストとしては同じだと言われている。日本人よりよく働くが、今の制度では3年経つと入れ替わるので、基本的に技術の蓄積は望めず、仕事もある程度限られたものになる。以前研修で来ていただいた方は、外国人労働者が帰国後に挫折しないよう、帰国後の状況を確認しているとのことだった。帰国後に現地で成功できるような、しっかりとした関係性をつくることで、現地での人材育成も可能になると思うので、そこまで考えた大きな仕組みにしないといけない。法律等の制約はあるが、これだけ人が少ない中では、外国人労働者が法人を経営することも選択肢に入れて考えた研修や受入制度が必要ではないか。例えば、作り手のなくなった園地に、外国人の方が就職して経営し、母国に農産物を売るといったようなことも良いのではないか。

低コスト化、省力化に向けたスマート農業への期待であるが、大潟村では8条のGPS田植機1台で、1日5ha位植えられるものの、実際のは場を見ると、1カ所くらい、30cm程度ずれているところがあるので、過信するほどの精度ではないと思う。ただ、作業スピードは速く、高精度のGPSを入れれば、ずれは少ないとのことである。

また、後付け機器は、載せ替え可能だが、農業機械ごとに設定が変わって調整が必要となり、大変面倒だと聞いている。メーカー純正でしっかりしたものを出してもらわないと、結局現場が混乱するが、高価格となりコストの話になってしまう。また、キャリブレーションのために田んぼの外周を1周回る必要があるとか、初めて作業する水田や、植え始めが斜めになりリセットした場合など、GPSの信号を取るために田んぼを1周回る必要があり、精度と価格のバランスがとれていない感じがする。

労働力不足については、先日、法人協会の若手会に、前農林水産事務次官の皆川芳嗣さんが講師で来てくれた。今、農福連携を進める日本農福連携協会の会長をやっているそうだが、ノウフクJASというものができ、本格化すればこれを表示した商品出回るとのことである。農福連携に関わる窓口を県庁に作る必要があると聞いたが、時期は決まっているのか。

□参事（兼）農山村振興課長

農業に取り組みたいという福祉事務所や特別支援学校からの問い合わせに対しては、農山村振興課がいったん受けて仕分けをし、園芸振興課や水田総合利用課等と情報共有している。

◎今野部会長

農福連携に取り組みたい農家が県庁の窓口に行って需要を聞き、マッチングしてくれるようになるとの話だった。大潟村の事業所からもチラシが入ってきて、近所ではハウスの草取りなどを依頼しており、そういったところから徐々に始まっていくのではないかと。ただ、法人協会等では漠然とした怖さがあるとの話が多いので、ある程度効率的な平場の農業よりも、中山間地域の方が合致すると思う。うちでも施設トマトを20aほどやっているのでも、そこでどのように働いてもらえば良いのか模索している。時間がかかっても、ある程度の熟練度は期待できると思うし、基本的に仕事をしたい方々であり、合った仕事を提供していくのも農業の役割だと思う。

担い手の確保については、建設業など他業種と農業との間で給料や待遇に差があり、ある程度魅力を感じないと農業に来てくれないので、これからの農業では、労務管理や給与規程などをしっかり見える形で準備して募集することが必要だと思う。

えだまめやねぎに続く品目として、大潟村のタマネギは、今年は収量が多いと聞いている。トウ立ちやpH障害などで不作の人もいるが、麦作後では4トン以上の人もいる。今年は全国的にタマネギの収穫量が多く、相場が厳しいようで、相場を考えていかないと野菜は難しいと感じた。また、葉を切って収穫するため、イギリスから葉を吸い上げてカットする機械を入れているそうだが、大潟村は地下水位が高いため、湿った泥を吸い上げ、更にカットした葉が詰まって故障してしまい、1ヶ月程度の部品待ちが出たりするようだ。北海道仕様の機械は本州で販売しないため、海外の機械に頼らざるを得ず、不要なコストに見えた。排水やpHなど、当たり前の管理をしていれば穫れることがわかったので、今後暗渠整備の事業などを利用しながら、4トン程度を目指していくとのことであるが、収穫と管理の省力化が思ったほどではなく、

現地に合った機械を県内で開発していけるのかが課題になるのではないかな。

次に、たねっこの工藤統括主任から、この場で意見を聞いた上で気がついたことや、実際に農業を実践されている中で日頃思っていること、スマート農業の今後の展開に必要なことなど、意見をいただきたいと思う。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

低コスト化、省力化に向けたスマート農業の導入に当たりクリアすべき課題についてであるが、機械が高額であるため、現状の経営体が導入するのは難しいと思っている。既に自らの経営規模で必要な機材を揃えて経営しているので、スマート農機の導入がどれだけ戦略的であるかは、かなり難しいことになる。その中で今後を考えると、たねっこの 300ha のほ場のうち、これまで個々の組合員が作業してきた部分が、高齢化によって一気に法人本体での作業となり、負担が増大した。随時導入してきた大型機械も当然更新の時期に入ってくる。そうした状況下で、スマート農業加速化実証プロジェクトの話をいただいたので、しっかりと 10 年、15 年という先を見据えながら、組合員の高齢化に対してどのように経営を変化していくべきなのかを実証している。おそらく 3、4 人くらいで 50ha 程度をやっていくことになると思うので、4 人で 4 セットと考えると、15～16 人でカバーできることになる。

◎今野部会長

4 人で 50ha か。そうすると経営面積が 300ha なので 6 倍になるのか。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

現在は、データ収集に支障がないよう、若干余力をもった人員配置をしており、3 人で十分だろうと思う。

単純には 6 倍だが、実際は 50ha 以上できる。1 セット 50ha としているが、もう少し効率的になり、面積を伸ばせると思うし、人数が増えると単純に 6 倍ではなくなる。もう少しデータが出てくれば、更にコストは下がり、省力化にかなり寄与すると思っている。個人経営では、例えば規模拡大と同時に機械を更新すると、現場としてはかなりプラスに振れるだろうと思っている。元々持っているトラクターは売らずに何かの専用にするだろうし、スマート農機にすれば素人でも作業できる。

まだまだこれからであるが、現状の経営規模でスマート農機を入れるのはかなり難しく、大潟村のように既に基準局があることなど、トータルで考える必要がある。

地域のほ場は、1 ha 区画ではあるがパイプラインではない。水管理のスマート化技術などがどれだけ使えるかということもある。

◎今野部会長

水管理は、実証の計画には入っているのか。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

水管理は入っていないが、センシングは4年目の取組であり、反収の向上ではなく、バラツキを抑えて底上げを図り、結果として全体の収量を増やしていく。地域のほ場は基盤整備後10年が経過し、だいぶバラツキや高低差が出てきているので、センシングしてバラツキを把握し、可変で肥料を散布してほ場全体のバラツキをなくしていく。特別栽培、減農薬減化学肥料栽培をやっており、化学肥料が窒素で4キロという制限の中でのバラツキ解消が課題だったが、4年間取り組んで去年良い結果が出た。今度は、バラツキのなくなったほ場で、一律で施肥した場合の検証もしている。こうした今までのデータを今回のスマート農業のプロジェクトにも反映させているところもあり、こういった技術をこれから発信できるのではないかな。

今日の意見交換を聞いた感想としては、秋田県は発信力が弱いと言われるが、ツールは既にあるので、発信の仕方だろうと思う。例えば、スマート農業関係だと、こまちチャンネルには少し載っているが、PRで重要なのは、おじいちゃんおばあちゃんの笑顔と子供がどう映り、若い世代がどう格好良く映るかということである。

中高生やUターンの職業体験研修については、小中高生で良いと思う。特に小中学生のときの体験が重要で、体験によって学力がすごく上がることがある。大仙市の取組で「ふるさと博士」というものがあり、大仙市内で頑張っている企業や農業の体験をすることによって、大仙市内の優良な企業に気づいてもらう。意外に、大仙市に住んでいても、良いところがわかっていない。大人も子供と一緒に行って魅力を発見してもらい、それをポイント制で評価する。最終的にふるさと博士に認定されると、市長が表彰する流れになっている。子供たちが地域に出て行く機会をどんどん作っており、30～40人の枠が受付開始からすぐに埋まってしまう。

教育委員会では、夏休みと冬休みに、企業見学デーと農業体験デーを設け、3～4コースを募集している。毎年、保護者も子供と楽しく農作業をすることを楽しみにやってくるようだ。こうした様々な取組があると非常にいいと思う。

農福連携については、様々な障害を一緒に考えてしまっているところがある。しっかり考えないといけないと思うものの、なかなかそこに考えが行かない。様々な障害について我々が勉強する環境があれば、取り組みやすくなると思う。福祉事業者からは、たねっこに仕事を求めて来るが、もう少し勉強しなければいけない。

◎今野部会長

事業所から説明会などがあれば、距離が縮まるかもしれない。

続いて、秋田県漁業協同組合の工藤専務から、漁業の生産振興と、資料にある項目について御意見をいただきたい。

◎秋田県漁協 工藤専務

I C Tを使った漁獲情報の伝達について、現在は、漁業者が獲った魚を、産地市場において仲買人が競り・入札で買うが、全部の魚が並んでから競りがスタートする。仲買人は、自らの販売先に対して営業しながら、買う魚を決めていくわけだが、並ん

でから競りの開始までの時間が非常に短いため、交渉相手もごく限られてしまう。それを、沖合からその日の漁獲情報、例えばハタハタであれば、大サイズのものが何キロ程度などといった情報が入ってくることによって、魚を見なくても競り・入札ができる体制ができるものと思っている。そうすると、仲買人も相手先との交渉時間がかなり取れるようになる。

現実問題として、漁業者も高齢化で減少しているが、仲買人もかなり減少し、産地における競争原理が働かなくなってきたおり、取引先から引き合いのある魚については競争があるが、他については量販店向けなどに低価格で購入されている。

今、品質向上に向けて、血抜きや神経抜きなどに取り組んでいるが、販売先では高値で取引されているものの、産地ではその評価自体がなされず、他と同様の価格で取引されている。そうすると、漁業者自体も、取り組む意欲がなくなってくる。沖合から漁獲情報が入ってくると、魚を見なくても商談が進むため、逆に漁業者の信頼性が非常に問われてくることとなる。自分の魚を少しでも高く売りたいとなれば、数量を正確に伝えるとともに、品質向上に向けた処理をしっかりと理解して取り組んでいくことになり、非常に効果的な対策だと思っている。

労働力不足の問題については、漁業は、活動場所も個人所有ではなく、対象とする魚も誰のものでもない。競争して獲るので、新規参入を拒むという傾向がある。だが、一定の水準を割るようになれば、ハード面での支援が受けられなくなるなどのデメリットが出てくるので、一定の人数の確保は必要だと思う。一方で、資源はあっても獲る人がおらず、資源が有効利用できていないところについては、新規参入を考えていかなければいけないと思っている。収獲物に時期による増減がある中で、農福連携だけでなく、他の産業と漁業との連携によって、双方の人材確保が可能になってくる。1次産業に限らず、半〇半Xというものでも良いと思う。漁業は、誰のものでもない場所で、誰のものでもない魚を獲るので、頑張れば頑張っただけ、自分に跳ね返ってくる。その面白さを若い人たちが感じてくれれば、まだ望みはあるのではないかな。

栽培漁業関係については、新しい魚種も、生産体制が整うまではかなり時間が掛かるので、今やっているマダイなど高い魚の種苗生産をしっかりとやってもらいたい。

魚食や漁村文化の話について、先日セリオンで、漁船から直接荷揚げをし、その魚を買ってもらおうということをやった。子供含め評判が良く、特に魚を船から揚げるところなどには人が集中しており、漁業者にとっては日常的事だが、価値観が人によってずいぶん違うと感じた。小中学生のレベルから漁業がどういう産業か教えていくことによって、秋田の漁業もまだまだ可能性があるのではないかとと思っている。

◎今野部会長

セリオンの船着き場か。また、1回限りの取組か。

◎秋田県漁協 工藤専務

普段は船は入ってこない漁協の前の岸壁に底引き漁船を入れ、その日の朝に出て行って獲ったものを水揚げした。発泡スチロールの蓋を開けると、エビなどまだ生きて

いて、ピチピチとはねる。そういうものが小学生などから人気があった。

漁業者としては、それだけのために毎回というわけにはいかないが、直売自体は、月一回以上実施することにしており、今週の土曜日にも行う予定である。

◎今野部会長

皆さんからひととおり意見をいただいたが、SNS等を活用した県産農畜産物のPRについてどう考えるか、また、中山間地ならではの魅力ある資源についてどのように情報発信していくかといったことに対する意見が少なかった。不足した部分を含め、全体的に各委員の皆様から御意見をいただきたいと思う。

◎佐藤委員

昨日の社長会議でも人材確保の話があり、入り口としてIT活用の話があった。結果としてそうなるかもしれないが、やはり体験することは百聞は一見にしかずであり、体験に導くことが一番ではないかと思う。工藤さんが先ほど話されたように、小中学生を呼んでやるのか、教育の一環として行うのか、もっと視野を広げてNPO法人与タイアップして範囲を広げるのか。誰をターゲットにして、単純に体験としてやるのか。最終的に就業を見据えるのであれば、中学生くらいを対象として地元限定するなど、やり方はいろいろあると思う。そういうふうな形でPRして、見える化していくことが一つのキーワードになるのではないかと。新規就業を希望する者を始め、新規就労以外の方にも、地域にある職業をPRすることが重要である。また、技術継承についても、見える化してマニュアル化することが重要であり、SNS等で発信していくことの一つになるのかもしれない。一次産業としての強みは、体験できるところであると思うので、手で触れて何かやるようなことを行うのが、効果として大きいのではないかと。

◎今野部会長

毎年7月第1日曜日に、我が家の田んぼで、田んぼの生き物観察会をやっている。15～16年くらいやっているが、最近は大潟村の子供が多い。村の子供は田んぼまでの距離が遠く、自分の家の田んぼにもなかなか行かない。小学生低学年だとなおさらである。親も含めて20人くらいが来て、ただ田んぼで遊んでいるだけだが、そういったものが最後に生きてくると思う。また、秋田市内からも2～3人来ていて、生き物に興味があり、夏休みの研究課題を八郎湖の魚でやりたいというような子供だった。

インターネットを経由した情報発信も大事だが、最後は、体験を軸としたファン作りになると思う。ファンがいつか農産物を買ってくれたり、一次産業の現場に入ってくれたり、一次産業を応援する仕事をしてくれるかもしれない。広い視野でファンになってもらうことが、おそらく情報発信の一番の目的だろうと思う。

中山間地域に特化して言えば、より一層生き物に配慮した農業や基盤整備が必要になってくると思う。40歳くらいで新規就農する人たちは、有機栽培を志向する人が多い。そういった人たちが、大潟村に来て農業を勉強するのではなく、中山間地域に行

って、手間はかかるが自分のやりたい農業を頑張ってもらうことで、地元の高齢者の生活を守る役割も担ってくれるのではないかな。また、そうした人たちは、就農前に都会でそれなりの給料をもらっている人が多く、友達もいるので、情報を発信をしていく。そうすれば、友達が遊びに来てくれるかもしれない。そういったつながりをしっかり作っていけば、単発のイベントよりも効果があるのではないかな。

◎館岡委員

J R 東京駅に行くと、男鹿の雲昌寺のあじさいのPRを見る。そうしたものをトップセールスするのも良い。

◎今野部会長

先ほどパイプラインの話が出たが、スマート農業に関連して、ほ場や用水路等の基盤整備に対する要望はないかな。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

現状の状態にスマート農機をマッチングしているので、言いにくいところであるが、例えば排水の法面はない方がいいし、水も、蛇口をひねれば出るのが当たり前になればいい。スマート農機は今後大きく進歩していくのでそれに期待するが、稲作で一番面倒なのが水管理であり、パイプラインや水管理の自動化が良いと思う。水管理が基礎であり、水管理をしながらほ場や稲の生育、草の状況を見ることが最も大事だが、それにかかる時間が非常に大きい。水管理が不要になるだけで効果は大きく、更にはそれをビッグデータ化して、すごく美味しい米を作る農家のデータを使わせてもらえば、みんな美味しい米ができるようになるのではないかな。例えば、次の良食味新品種において最適な水管理のデータがあれば、それを使ってある程度揃ったお米ができるのではないかなと思う。

ほ場整備に限れば、当地区は 50m×200m 区画で、大潟村とは状況が違う。

◎今野部会長

大潟村は 1.25ha 区画であり、縦の長さは変えず横に 3 枚つなげている人もいる。私は 2 枚つなげて 2.5ha にしており、作業が楽である。今日、縦が 200m のほ場を見せてもらったが、遠くて田植えが大変ではないかなと思った。横に長くて、水口と排水が何個かあれば問題ない。ロータリー作業も、1.25ha を回るより、2.5ha の方が速い。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

回る回数が少ないと、時間も少なく済むのか。

◎今野部会長

2.5ha で 3 時間弱であり、少し短縮されるくらいだが、畔際の作業や草刈りも減る。また、今年は排水側の見回りを止めている。失敗もあるが、漏水箇所は大体決まって

おり、可能であれば、漏水などイレギュラーなところを察知するだけで良いのではないか思っている。

基盤整備については、大潟村のように幅の広い用水路は絶対必要だし、できるだけ奥行きがあつて、横に長いほ場であつた方が、作業がしやすいのではないか。排水路は、大雨などを考えると、ある程度落差があつた方が良いが、取水から末端までの高低差があるので、全部同じように落差を付けるのは難しいと思う。

生き物に配慮した基盤整備と、かなり逆行する部分があるが、自然環境が土台にある農業であるという基本をしっかりと押さえた上での基盤整備が重要だろうと思っている。他には、落水ボックスの板の開閉を自動化したいと思ったときに、ソーラーを含め、排水側までどうやって電気を引くかというようなことを考えている。

今日見たあの用水路だと、どれくらいで水がたまるのか。

◎（農）たねっこ 工藤統括主任

一晩で2枚くらいたまる。大潟村ではどうなのか。パイプラインではどうか。

◎今野部会長

大潟村だと、下流の人に気を遣いながらも4枚くらいたまる。

パイプラインは、均一に水が出るが、全員が使いすぎると供給が間に合わなくなる。大潟村ではパイプラインの話があるので、整備されればそうした話も出てくると思う。10年後になるのかわからないが、今盛んにボーリング調査が行われている。

◎今野部会長

まだ意見があるかと思うが、予定の時刻が近づいてきたので、議事（3）その他に移りたい。

□農林政策課企画・広報班長

8月26日に予定されている総合政策審議会企画部会の中で、これまでの専門部会の意見のうち、他の専門部会と調整を図る案件の有無について報告を求められている。今日の意見の中では、他の部会に関係するような意見はあつたが、企画部会に諮って調整するような内容はなかったと思うので、「なし」として報告してよいか。

◎今野部会長

よろしいか。（各委員に確認後）大丈夫である。

□農林政策課企画・広報班長

では、「なし」と報告させていただく。

◎今野部会長

それでは、予定の時刻になったので、議事に関する意見交換を終了させていただく。

事務局におかれては、今回の意見を参考にし、次回までに提言書（案）を取りまとめ、再度皆さんと協議したいと思う。

6 農林水産部次長あいさつ

□農林水産部小野次長

本日は今野部会長を始め、委員の皆様、たねっこの工藤さん、漁協の工藤専務、それぞれ議論いただき感謝申し上げます。特に今回は少し趣向を変え、午後から現地視察を実施しており、たねっこの皆様にはお忙しい中、視察を受け入れていただき、改めて感謝申し上げます。

委員の皆様からは、それぞれの立場から意見をいただいたが、共通する話題がいくつかあったと思っている。一つが、これまで、農林水産業の振興に向け、新規就業者の数に重きを置いて取り組んできたが、質という面についてもっと考えていく必要があるということである。研修カリキュラムの見直しなどを始め、量も重要だが、農林水産業を担ってもらうという意味では、質にも目を向けていかなければいけないという思いをした。国でも農福連携を目玉として打ち出すとしており、本県においても、今一度、福祉サイドと農林サイドのマッチングという観点での取り組んでいく必要があるのではないかと考えている。

人材確保の観点では、農林水産分野だけではなく、福祉も含め、他の業種との連携も視野に入れなければいけないと思う。

今回視察していただいたスマート農業については、農林水産部の大きな柱として掲げ、国の事業を活用して農業者、農業団体とも連携しながら一生懸命取り組んでいるところである。技術面では今後解決すべき課題もあるが、最終的には導入効果の有無を見極めながら、県としても必要なサポートを行いたい。

若い世代の人がもっと農林水産業に就いてほしいということで、小学生中学生の頃から様々な良い経験をさせ、将来の人材確保にどう結びつけていくかが大事である。小学生が魚に触れる体験では、プールに放した魚を、親がやめろと言っても目を輝かせてずっと触っている。漁業に限らず、小さいときの体験は、将来の担い手や就業につながっていくと思うので、SNSも含め、そういった人たちにどうやったら良さを伝えていけるのか、といったことも考えていかなければいけない。

いずれ、このように、農林漁業者が減少する中で、いかに人材を確保して農林水産業の拡大につなげていくかといった視点で、これからも皆さんの意見を反映させながらやっていくので、今後もよろしくお願いします。

今回は8月28日を予定しており、10月15日の総合政策審議会に提言書を提出するための提言案を示したいと思っているので、また皆様から忌憚のない意見をいただければと思っている。